

「夏越の祓と年越の祓」

沼崎富 ● 公益財団法人日本吟剣詩舞振興会会長

この月刊誌「吟剣詩舞」7月号が発刊される時は、6月末日頃ではないかと思われま

す。丁度、一年の上半期の最終日でもあります。そこで先ず思い浮かびますのは、毎年6月の晦日に行なわれます大祓の神事であり、今年前半の厄災を祓い浄める儀式が、夏越の祓であります。各神社では参詣人に茅の輪を八の字に3回くぐらせ、また、紙の人形に姓名・年齢を書

いて川に流して祓い浄めるとのことです。

3年ぶりに、未だ新型コロナウイルス感染症が収束に至らぬ中、そして、新型コロナウイルスのリバウンド警戒期間の中、東京都北区王子の北とびあ「さくらホール」に於いて開催された「第52回全国吟剣詩舞道大会」の折には、皆様方のご支援ご協力を頂き、どうか大過無く終了することが出来まし

た。改めまして、衷心より御礼申し上げます。

今年前半の各事業につきましては、昨年に引き続き、感染防止対策には十分留意をしつつ、事業の推進をして参りました。この夏越の祓の節目に当たり、古くから執り行なわれて参りました神事に倣い、「水無月の夏越の祓する人は千歳の命延ぶといふなり」(六月の夏越の祓をする人は、寿命が延びて千年も

の命を得られるということだ)〈拾遺和歌集よみびと知らず〉と唱えて見ましよう。

そして、今年後半が私共にとりまして、これ以上新型コロナウイルス感染症に翻弄されること無く、予定されております各事業が順調に開催され、来たる12月の年越の祓を飲みを以て迎えられ、そして、良いお正月が迎えられますよう願うばかりであります。



3年ぶりに帰ってきた

日本財団助成事業 高松宮妃癌研究基金奉賛 第52回全国吟剣詩舞道大会 吟剣詩舞界 最大の大会

合吟コンクールで最高齢93歳の日本吟声流山中梅鈴宗主(写真左中央。両側は曾孫の白梅子さんと紅梅子さん)と、最年少6歳の吟詠静風流桑名優希君(写真右)。日本吟声流梅子チームは見事3位入賞、優希君は翌週の全国吟詠コンクール東京都大会で6位入賞を果たした

満席となった1,300名収容の「北とびあ さくらホール」。合吟コンクールでは、おもに2階席に陣取った各チームの出場者が他のチームの合吟に熱心に聴き入った

新型コロナウイルスの影響により、令和元年11月に国技館での第51回大会以来開催されなかった「全国吟剣詩舞道大会」。第1回から日本武道館で開催されてきたため「武道館大会」の通称で親しまれてきましたが、今回は東京都北区の「北とびあ」で開催。1300名収容のさくらホールは2階席まで満席。35人から11人に縮小されたものの合吟コンクールも実施され、会場は終始久々の大会開幕を喜ぶ出場者および観客の興奮に包まれました。

日時…令和4年5月5日(木祝)
場所…北とびあ・さくらホール
主催…公益財団法人日本吟剣詩舞振興会
後援…日本財団



企画構成番組「頼山陽」で、『獄中の作』(頼鴨屋)を舞う多田正満・正稔兄弟と多田正晃大日本正義流宗家。正晃宗家が鬼気迫る演舞で、安政の大獄で処刑された頼山陽の三男、頼鴨屋(三樹三郎)の怒りと無念を表現した。吟詠は左から巽吟城、前田卓霊、佐々木秀景



左:企画構成番組の最後、『日の出ずる処』を連吟する河野鶴聲(左)・和田彩楓(右)青研吟士。「中国の東の海(日本)からは一輪の太陽がいつも変わらず昇っている」という頼山陽の「日本賛歌」で大会の幕を閉じた
右:こどもの日の開催とあって多くの幼少年も出場。写真は「全国地区連絡協議会推薦 吟剣詩舞」での東日本地区連絡協議会代表による『富士山』。最後に吟詠と剣詩舞の子ども達が一列に並んで、扇子により富士山の山容を表現した

昨年度認定の少壮吟士の表彰も

例年5月5日こどもの日は、日本全国持ち回りで「名流大会」が開催される日。しかし今年は今和元年以来実施できなかった「全国吟剣詩舞道大会」が、秋から春に移って開催されました。朝早くから合吟コンクールの出場者が揃いの着物、スーツ姿

で続々と北区王子の「北とぴあ」に集合。9時の開場とともに、あつという間に席が埋まっています。9時半にベルが鳴るとともに開幕。徳田寿風大会副会長が開会のことばを述べた後、全員起立して『君が代』を黙唱。続いて壇上に立った日本吟

剣詩舞振興会沼崎富会長は「3年ぶりにこのように発表の場を設けることができますのは誠に感慨深いものがあります。今大会を通して我々が長年愛好してまいりました吟剣詩舞に久々に触れる喜びとともに、コロナ禍において少人数での合吟コンクールはひとつの選択肢になると考えております」と挨拶しました。「吟剣詩舞大賞」の表彰では、徳田寿風大会副会長が25年ぶりに芸術賞を受賞したほか、4人が功労賞を受賞しました(写真参照)。また昨年



これまでの日本武道館に変わり、東京都北区の複合文化施設「北とぴあ」で開催。17階の高層ビルで北区のシンボリック的存在

全国吟剣詩舞道大会が開催されなかったため行われなかった「第四十二期少壮吟士の紹介と表彰」も実施されました(写真参照)。



上:「令和三年度吟剣詩舞大賞受賞者発表と表彰」。左端は平成十一年度の鈴木吟亮二代宗家以来25年ぶりに芸術賞を受賞した徳田寿風大会副会長。以下功労賞で左から八文字剛洲、杉山翔鴻、山口華雋、向山侑吟各氏

下:昨年の大会が中止となったため行われなかった「第四十二期少壮吟士の紹介と表彰」も実施。前列左から林煌彩、石川渾風、星野紫栄各少壮吟士。表彰を受けているのは体調不良で欠席した大山宗鶴少壮吟士の代理を務める朝翠流佐々木翠鵬宗家

【第49回全国少壮吟詠家審査コンクール決選大会入選者吟詠】



牛島玲豊

「もう胸いっぱい緊張しました。先生から最後『思い切つて詠ってこい』と励ましの言葉をいただきましたので、その通りに詠ったつもりです。少壮吟士の先輩方からは『頑張つてね』と優しい言葉をかけていただいて感激しました。先輩方を見習って、詩情を伝えられるような吟士になれるよう勉強していきたいです」



大森麗穂

「今日はただ間違えないように、言葉をはっきりと、きれいに詠むことだけを考えました。(少壮吟士候補となつて)うれしさはもちろんなりませんが、不安の方が今は大きいです。先輩方とはご挨拶はしましたが、もうオーラというか、雰囲気全然違うなというのが正直なところで、自分もそうなるよう頑張りたいです」

【全国吟詠合吟コンクール】

11人に変更しても変わらぬ熱吟

吟詠愛好家の憧れの舞台であり、「全国吟剣詩舞道大会」のメインイベントのひとつでもある「全国吟詠合吟コンクール」。大会が2日間開催となった平成二十七年第47大会以降は、企画構成番組がない日

の目玉として開催されてきました。これまで1チーム最大35人で行われてきた合吟コンクールですが、昨年1月に実施された「吟剣詩舞活動における飛沫飛散状況検証」により、2列で合吟すると前列の吟者に飛沫が飛ぶことが確認。11人に人数を減らして横一列で合吟す

ることに変更となりました。この変更により流派によつては出場できなくなった会員が出た。逆にこれまで35人集まらなかったが参加できるようになったなど、悲喜こもごもの変化がありました。伴奏曲が間違つていて5組がやり直すというアクシデントもありましたが、3年ぶりに仲間と声を合わせて合吟できるという喜びに包まれた晴れやかな舞台が展開されました。



優勝 岳精流日本吟院総本部 女子(神奈川) 吟題:『桑乾を渡る』(賈島)

「平成18年度に優勝して以来、上位入賞はあったのですが、優勝は16年ぶりです。令和元年の新潟での国文祭で行われた『五人合吟コンクール』で優勝したのですが、その時のメンバーが私(当時は辻寛風の名前で出場)を含めて3人入っています。今回は35人から11人になり、8本出る方というのが条件になりました。35人だとお互いにカバーし合いながら、もう少し幅広い本数の人でできるんですけど(横山龍精)。「私は50人の時からやっていますが、やはり大勢でやったほうがにぎやかで楽しいですね(笑)」(大森精翠)。「練習は月に2回計10回やりましたが、最後ピタッとそろって終わるのもポイントでしたね。うまくって良かったです(横山龍精)」



2位 東京都吟剣詩舞道総連盟 男子(東京) 吟題:『汪倫に贈る』(李白)

「男子チームの3位以内入賞は平成25年度大会以来のことですが、チームとしてもトップ3は初めてのことです。最高の気分です。私がリーダーとして先導を務めるのはおこがましい限りですが、全身全霊を傾けました。メンバーに恵まれました(三浦暁泉)。「いや、リーダーが良かったですね(笑)」(杉本嶽駿)。「メンバーは4本出る人ばかりですが、3本でやって気持ちを伝えることを重視しました。流派は全員違うので節調の違いはありましたが、一番高いところの音を、一瞬間を置いてみんなで声を合わせてパーンと出せるように練習しました(三浦暁泉)」



3位 日本吟声流 梅チーム 女子(熊本) 吟題:『汪倫に贈る』(李白)

「飛行機の都合で皆表彰式に出られなかったのですが、連絡したらとても喜んでいました。長女が全国コンクール優勝者の発表で出るので、祖母(山中梅鈴宗主)も含めて皆で応援に来ようとしたのですが、それなら合吟コンクールにも出てみようかと。そうしたら祖母が『だったら自分が先導をする』と言ってきて、大腿骨折で入院していたのでまず歩くのが心配でしたが、稽古場で歩く距離も測って練習しました。祖母の両側を娘たちがはさんで、手の大きい次女が手を引きました(笑)。吟歴80年以上で初のコンクールで3位になれて、本当に感激です(山中梅鈴子少壮吟士)」

全国地区連絡協議会推薦



四国地区連絡協議会 徳島県総連『鳴門海峡』

四国地区代表は、徳島らしい吟題『鳴門海峡』を4流派で構成された老練の吟詠と、中学2年生から大人まで3流派6名の舞い手で演じました。力強い吟声、躍動感あふれる舞で壮麗な鳴門の渦潮を表現し、会場を魅了しました



東日本地区連絡協議会 神奈川県総連『富士山』

東日本地区代表は、可憐な晴れ着姿の女の子7名による吟詠チームと、7歳から13歳の幼少年5名による詩舞チーム。扇子で龍の動きを華麗に見せ、全員で吟題の『富士山』を形作る会場は大喝采で湧きました

全国コンクール優勝者の披露

剣舞 少年の部 優勝 堀真悠子

上杉謙信『九月十三夜陣中の作』
令和元年度剣詩舞群舞コンクール 群舞・剣舞
梁川星巖『一の谷懐古』

昨年の剣舞の少年の部での優勝、令和元年度の剣舞群舞の優勝の2つのお披露目となった堀さん。「大きな舞台上で続けて2つ踊りをやることはめったにないので、大変でしたけど楽しかったです。扇子をくるくる回すところ、山を描くところは綺麗に見せたいので安定するように何度も練習しました」



詩舞 幼年の部 優勝 深井萌衣

杜牧『山行』

深井さんは、昨年のコンクール時に比べて5センチも身長が伸びたそう。「今日の舞台では、少し真ん中を外してしまいそうになったけど、上手くできたと思います。身長が伸びた分、上手にバランスをとるよう調整してきました。次は剣舞の岐阜県大会があります。剣舞で一人舞台は初めてですが頑張ります」



剣舞 幼年の部 優勝 埴寛介

釈月性『将に東遊せんとして壁に題す』

優勝者として堂々とした剣舞を披露した埴さん。舞台上立つ前は少し不安があったと言います。「最初は緊張したけど、踊り始めたら大丈夫になりました。全国コンクールの後、もうちょっと上手にしたいと思って練習してきて、その成果は出せたと思います。詩舞の方も県大会に向けて練習しています」



吟詠 少年の部 優勝 山中七海

菅原道真『九月十日』

優勝者としてステージに立てることはとても光栄だと語る山中さん。「コンクールの時は本当に緊張しましたが、今回の舞台まで練習を重ね、落ち着いて歌うことができたと思います。未熟な点を母や祖母に注意されることが多いですが、少しずつ慣れていって、私の憧れの曾祖母のように歌えるよう頑張りたいです」



吟詠 幼年の部 優勝 阿部尊生

朱熹『偶成』

『偶成』に強い思い入れを持って練習してきたという阿部さん。「緊張したけど、終わった後は清々しい気持ちになりました。降りてくるところがちょっとブレていたんで、そこを意識して強くすることでブレないように練習してきました。これから少年の部に向けて、『偶成』の次に歌う吟詠を見つけていきたいです」



詩舞 少年の部 優勝 森凜華

広瀬旭荘『桜祠に遊ぶ』
令和元年度剣詩舞群舞コンクール 群舞・剣舞
頼山陽『天草洋に泊す』

森さんも詩舞の少年の部、詩舞の群舞と2演目で登場。「今日の舞台では最後まできちんと止まることができました。緩急もしっかりつけられました。昨年から比べると、自分の気持ちを乗せて踊れるようになったと思います。剣舞は幼年から1回も優勝していないので、今後は苦しい剣舞で頑張りたいです」



幼少年の吟剣詩舞
若者たちによる躍動の舞台

吟剣詩舞道大会のステージでは、次世代を担う若者たちが舞い歌う姿もみられました。登場したのは、幼少年代表や全国地区連絡協議会推薦の団体のほか、昨年の全国コンクールの幼少年部門で栄冠を勝ち取った優勝者たち。日頃の稽古の成果を存分に発揮し、フレッシュな演技を披露してくれました。

コロナ禍で表舞台へ立てぬ日が続いていても、全国各地の幼少年の皆さんは日々稽古を重ね、成長を続けています。

幼少年代表として出演した東日本地区連絡協議会は、剣舞『泉岳寺』、詩舞『弘道館に梅花を賞す』の2題を制服姿の中高校生たちが合吟。吟に合わせて舞う剣舞は小学生から高校生までの混成チーム、詩舞は高校生のチームといずれも吟剣詩舞界の未来を担う子どもたちの演舞でした。さらに、全国地区連絡協議会推薦団体でも若者たちが活躍。東日本地区代表は、『富士山』を合吟する5歳から14歳まで

の女の子たちと、合わせて舞う幼少年詩舞チームの懸命な演技に、惜しめない拍手が送られました。また、四国地区代表として登場した徳島県総連の皆さんは、各流派が一緒に練習を重ねたという迫力ある『鳴門海峡』を熱演し会場を沸かせました。開催地代表の東京都総連による『九段の桜』、『松竹梅』も披露され、若い力がみなぎるステージとなったのです。

続いて、昨年行われた剣詩舞、吟詠の全国コンクールで優勝した幼少年たちが登場。それぞれが優勝者という貫録をそなえ、一回り成長した姿で演目を披露しました。

幼少年代表



東日本地区連絡協議会 詩舞『弘道館に梅花を賞す』

東京都立六本木高校の吟詠剣詩舞同好会から、OGを含む生徒6名がステージへ颯爽と現れて、扇で千樹の梅を表現。部活動として週に2回ほど練習しながら、今年夏に東京で開催される全国高等学校総合文化祭の舞台を目標として鍛錬を続けるそうです



東日本地区連絡協議会 剣舞『泉岳寺』

松宮わかばさんたち5名の中高校生が合吟する『泉岳寺』に合わせて、赤穂浪士に扮した舞手が勇ましく登場。高校3年生の神田蓉さんを筆頭には7歳の豆剣士まで、息の揃った8名の浪士たちは見事に本懐を遂げ、大舞台を盛り上げました

一堂に会して行う楽しさは 格別なものです

スーパーチーム校長：早淵鯉将



「今回はスーパーチーム単独の番組ではなく、企画番組の中で演舞するということが、台本を見たらオープニングが『本能寺』だったのでそれをやらせていただくことにしました。集まってる練習は3月と4月末の2回行いましたが、1回目は練習場の関係で声出しができませんという状況で、吟詠と剣詩舞あわせての稽古は一度だけでした。振付は新しく教官になられた藤上翔山先生と上岡暁壮先生にお願いしました」

「皆が集まったのは武道館にて無観客で行った令和2年11月の「吟と舞祭り」以来でしたが、チームワークはもちろん以前のままで、本当に楽しそうだなという印象でした。コロナ禍の中、個別で吟剣詩舞を発信する活動をしてきたメンバーも多いですが、一堂に会して行う楽しさはやはり特別なものと思います」

「企画番組の中なので、後から出てくる他の先生方の舞台と雰囲気の違いがすぎないよう、注意しました。そのため独自のアレンジは控えましたが、その中でもスーパーチームらしさが出せればと。何しろコロナが何とかならないと練習もままなりません、状況を見ながら財団本部と相談して活性化を図っていきたいと思います」



今大会で卒業した井戸水帝(前列左)と鈴木悠容(前列右)の2人には、メンバーから寄せ書きも贈られた

スーパーチームを卒業

スーパーチームは35歳までという規定。今大会では剣詩舞の鈴木悠容、吟詠の井戸水帝両メンバーが卒業、早淵鯉将校長から卒業証書が手渡された。



「いろんな流統の技を教えてもらって諸先生方の素晴らしい振付をいただき、このメンバーの中で踊れたことがすごく自分の人生の財産になっています」(鈴木悠容)、「2期生として入ってきて皆さんとどう接するか悩みましたが、みんな優しく受け入れてくれました。貴重な経験ができ、いろんな世代の仲間ができたことは本当に貴重な財産だと思います」(井戸水帝)と感謝の言葉を述べた。

【第四十二期少壮吟士のコメント】 *大山宗鵬少壮吟士は体調不良のために欠席



林煌彩少壮吟士

「少壮吟士の名に恥じない吟をと臨みましたが、教本にはない初めての吟題でしたし緊張もあって少し悔やまれるところも…。でも、先輩方と同じ舞台上に立てる喜びは大きかったです。お手本となる先生方の背中を追いかけ精進したいと思います。少壮吟士を目指す手が増えるよう、しっかりとした吟と振る舞いを心掛けたいです」



星野紫榮少壮吟士

「いただいた賞状がとても重く、少壮の重みを強く感じ身を引き締めて舞台上に臨みました。今回は『源廷尉弓を波上に収むるの図』という初めての詩で、毎日念仏のように唱えて練習しました。他の先生方に迷惑をかけるように、という気持ちだけでした。今後は聞いてくださる皆様の印象に残るような吟ができればと思います」



石川渾風少壮吟士

「少壮として初の大舞台、失敗したら素晴らしい先生方の吟が台無しになる…と思うと本当に緊張しました。ご一緒した中野祥理先生は強い吟がお得意だということで、普段私は強い吟をあまりしないのですが、負けないう頑張りました。福島在住の私は東北で唯一の少壮吟士ということで東北全体を盛り上げていきたいです」



企画構成番組「頼山陽」のオープニングで『本能寺』を演舞するスーパーチーム。出場したメンバーは吟詠が森田夏星、向山侑諒、藤吉光瑞子、井戸水帝、原瑞真、松葉水滸、坂本麗峰。剣詩舞が早淵鯉仙、五月女凱昂、入倉昭山、増井鯉冠、上岡暁雅、上岡暁隆、見城星梅月、鈴木悠容、杉浦裕容、多田正千衣、青柳芳慈、堀木咲明

「吟詠・剣詩舞スーパーチーム」 離れてさらに強固になった チームワーク

平成27年の「第47回全国吟剣詩舞道大会」で、鮮烈なデビューを飾った剣詩舞スーパーチーム。シンセサイザーによる楽曲『Passion』に乗って躍動する若者たちに武道館を埋めた観客は喝采を贈り、吟剣詩舞の輝かしい未来を感じさせました。

翌年には吟詠スーパーチームも誕生、第50回大会からは「吟剣詩舞スーパーチーム」としてコラボレーションするのが定番となり、数々の実験的な取り組みにより吟剣詩舞の新しいあり方を模索してきました。今大会では、企画構成番組「頼山陽」のオープニングに登場。吟詠7人、剣詩舞12人により『本能寺』

に挑みます。「今回は企画構成番組の中なので、他の出演者の方々と雰囲気がかげ離れすぎないように留意しました」(早淵鯉将スーパーチーム校長)というところで、オリジナル曲の時のような実験的なパフォーマンスは控えましたが、それでも吟詠スーパーチームが移動する、男女でのハーモニーを奏でる、剣舞と詩舞がさまざまなフォーメーションを駆使するなど、随所にスーパーチームらしさを発揮して満員の観客を魅了しました。

全国コンクール優勝者も多数輩出

スーパーチームは元々全国コンクールで優秀な成績を収めた者を選抜したので、全国コンクールのとくに青年の部ではメンバー同士の激しい戦いが繰り広げられる。昨年度も青年の部は3種目ともメンバーが制覇。下の3人以外に吟詠青年の部の松葉真緒さん、群舞・剣舞の増井章高さん、群舞・詩舞の柴田譲さんも優勝者の披露を行った。

剣舞青年の部 原光希 演題「易水送別」



「平成30年度に吟詠少年で優勝して以来です。緊張はしましたが、このコンクールの舞を見せようというより、詩の内容をしっかりと表現することに留意しました。都連代表を含めて3回出場がありますが、一つ一つ丁寧に行うと心がけてきました」

詩舞青年の部 五月女智仁 演題「弘道館に梅花を賞す」



「剣舞少年の優勝以来15年ぶりですが、変わらず楽しくできました。コンクールの舞を見せようというより、詩の内容をしっかりと表現することに留意しました。都連代表を含めて3回出場がありますが、一つ一つ丁寧に行うと心がけてきました」

詩舞一般部 鈴木宏実 演題「春月」



「とても緊張しました。体力が衰える一方で、コンクールでやった踊りよりももっとうまく思うと、気持ちがあせってしまつて(笑)。スーパーチームでは最後の舞台になりますけど、今の気持ちを保ちながら、みんなと楽しく踊りたいなと思います」



演題：『梅花煙月の園』 吟：小池貴心、堤 龍美 舞：菊水流

頼山陽が訪れたことのある美濃国の女流詩人、梁川紅蘭作の漢詩。コレラで病死した夫の梁川星巖の身代わりとして安政の大獄で捕縛されたが、翌年に釈放された



演題：『述懐』 吟：浅田聖謙、石川春海 舞：日本壮心流

頼山陽が13歳の時に書いた漢詩。「昌平覺」の教授であった柴野栗山を大いに感心させた。舞は日本壮心流の入倉昭星宗家と、次男である入倉昭鳳が指導する東京支部のメンバー

幕末の志士に大きな影響を与えた頼山陽の魅力

原作：中西倭、脚本・演出：加納誠旺両氏に聞く



二人三脚で「頼山陽」を作り上げた中西倭氏(左)と加納誠旺氏(右)。8年間にわたる名コンビだ

「高校1年の時に級友に誘われて詩吟部に入り、以降60年以上の吟歴です。30歳すぎたあたりから舞台の演出に興味を持ち始めて、流派(関西吟詩文化協会)の大会で構成吟の脚本・演出を手がけるようになりました。そして中西先生と知り合い、『発想力がすごい人だな』と感心して、8年くらい前からコ

ンビを組むようになりました。今回は詩吟とは何か、頼山陽とはどんな人かできるだけわかりやすく一般の人にも伝えたいと思い、かねてから知り合いだった絵コンテ作家の林みどりさんにイラストを書いてもらうとともに、彼女は常磐津の師匠(常磐津綱鵬名義)でもあるので、演出の一環として常磐津も披露してもらいました」(加納誠旺)

「元々物を書くのが好きで高校時代から小説を書いたりしていましたが、たまたま2008年に神戸のワールド記念ホールで行われた関西吟詩文化協会75周年記念大会を見て、『こんな世界があるんだ』と感激して加納先生を紹介していただきました。頼山陽は山本五十六が激賞しているのを読んで興味を持ち、漢詩だけでなく彼の生き方にも触れて共感し、今回テーマにすることにしました。江戸で活躍した人なので、この東京から広く頼山陽の魅力が発信できればいいなと思っています」(中西倭)



演題：『静御前』 吟：伊藤契麗、八代光晃子、塩澤宗鳳、山岡桜山 舞：青柳流

源義経の想い人・静御前が源頼朝の前で舞いながら詠った和歌「しずやしず」を挿入した一曲。青柳流青柳弦太郎宗範が頼朝に扮し、宗嗣の妻・青柳芳優が情感を込めて舞った



頼山陽の生涯を絵コンテで表現した林みどりさんは、常磐津綱鵬の名で常磐津も演奏。今回も重要な場面で三味線をつまびいた

【特別企画構成番組】 稀代の漢詩家「頼山陽」の 世界

「全国吟剣詩舞道大会」のハイライト、企画構成番組。今回のテーマは吟剣詩舞の世界では知らぬ者はいない日本屈指の漢詩家「頼山陽」。3年前に企画構成番組の脚本の公募があり、それに応募した関西の吟詠家中西倭・加納誠旺両氏のコンビによる作品が見事に採用されました。頼山陽が半生をかけて編纂した歴史書『日本外史』は、幕末の志士

たちの尊皇思想に大きな影響を与えました。その頼山陽と所縁の人々の漢詩や和歌を、少壮吟士など吟界トップの吟詠家と、日本全国の有名社中の剣詩舞家がコラボレーションして吟と舞で織りなす一大ステージです。

頼山陽の母である頼静子の和歌など、これまで吟剣詩舞で扱われたことのないものもありますが、「加納先生は父(松葉水勲宗家)の大学詩吟部の1年先輩ですが、ささくにくいる教えてくださり、自分たちでも調べて譜付けしました」(松葉水緑少壮吟士)と、各吟士に任せられたとのこと。

スーパーチームによる『本能寺』からフィナーレの『日の出ずる処』まで全二十題(和歌は四歌で一題)と、あつという間の1時間半。観客は最高の舞台上に酔いしれ、頼山陽の日本を想う心に感動を新たにしました。



演題：『不識庵機山を撃つ囃に題す』 吟：今城龍栄、蔭田淳芳心 舞：神刀流

頼山陽の、というよりも詩吟としてもっとも有名で、『川中島』の通称で知られる一曲。山本兼正宗家率いる神刀流が、武田信玄と上杉謙信に扮して川中島の戦いを再現した